
さぼてん

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さぼてん

【コード】

N42200

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

さらっと読める。

なんか頭に残る。

そんな小説です。

「はあくあ、人生ってあまくねーな」あ。」
男はどつかとベンチに座り、手に持っていたサボテンの鉢を横に置いた。
背もたれにもたれかかり、上を見上げると木々の間から太陽の光が降り注いでいた。秋の太陽。空気が冷たくなってきているから、今までより清らかな物を感じる。
その中においても男の心は晴れない。

話は1年前にさかのぼる。

男には友達がいた。名前はエリカ。一重まぶたのくせに、やたらと目が大きく、初めて会ったときには違和感を感じたほどだ。

お互い社会人に成り立ての夏、独り暮らしの寂しさも手伝い、職場が一緒だった二人はお互いの部屋に行き来し、酒を呑むのが週末の過ごし方だった。

お互い一人暮らし、なんの遠慮もなく、ただだらだらと職場のグチを言い合いながら酒を呑む。そんな日々が続いた。

でも、身体の関係は一度もなかった。そこに進むと後には戻れなくなる気がしていた。だから、お互いそこは暗黙の了解で、色っぽい話が上がることもなかった。

そんなエリカがある日小さなサボテンの鉢を買ってきた。

「ねえねえ知ってる？サボテンって悪い電磁波を吸い込んでくれるらしいよ。」

「へえ、サボテンって砂漠にいるだけあるな。水だけじゃなくていろんな物吸い込むんだ。」

「そう！だからこれをテレビに置いておくと部屋がクリーンになる

のよ。いろんなものを吸って、きれいな花を咲かすの！」
「んで、それを俺にくれるんだ。いいところあるね〜」
「違うわ、私が入る部屋だからクリーンであって欲しいのよ。」
「でも、電磁波を吸い込んだ花は汚そうだな…」
「それもそうね。」

それ以来、サボテンの鉢は男の部屋のテレビの上、ちょこんとあった。

ビールが旨い夏から、日本酒が染みる秋になりかけた頃。

エリカが辞めた。

「社会の歯車に組み込まれるのに耐えられなくなったのよ。」と言っていたが、本当の事はわからない。

職場の女の子の間では、「上司と不倫してばれて辞めた」とか、「セクハラに耐えられなくなった」とか、きな臭い噂が飛び交っていた。元々群れる女ではなかったたので、いいターゲットにされただろう。

最終日、机の整理をテキパキと終え、定時になるまでの10分、エリカはイスに座ってぼんやりしていた。

男は書類の整理に追われながらも、エリカの横顔をそつと盗み見た。哀しい感じでもなく、寂しい感じでもなく、怒っている感じでもなく、昨日までと同じ顔をしているエリカの顔があった。

書類の文字がにじんだ。

自分でもわからないけど、泣いてしまったようだ。こんな所は見せられないので、男はトイレに走った。

トイレに入っても涙は止まらない。溢れてくる涙の訳は一つしかない。なんてことはない会話、なんてことはない顔、そうした物に気付くことなく引かれていたんだ。無くしそうになってから気付くことがこの世にはいっぱいある。

そう思ったらいてもたってもいられなくなった。トイレから飛び出て、机に戻る。

時間は5時8分。エリカは帰っていた。

男は自分の机にあるメモに気付いた。

「サボテンの花、見たかったな。」

エリカの家は知っていた。でも、すぐに行くのは気が引けた。サボテンの花が咲いたら行こう。その想いをムネに、男はサボテンに水をやり続けた。

1年後、花が咲いた。

毎朝見るめざましテレビの占いの最中に気付いた。

男のみずがめ座は1位だった。

男は、職場に電話をした。ずる休みは生まれて初めてだったが、後ろめたさはなかった。晴れ晴れした気分だった。

エリカの家は知っている。大きな公園の側のアパートの2階。

はやる気持ちは扉の前で砕け散った。

ドアの前には表札があった。

「エリカ シュンスケ」

男はもう一度大きなため息をついた。

俺は何をやっているんだろう。会社を休んで、思いつきでここまで来てしまうなんて。恋は盲目と言った物だ。遊歩道にあるベンチには光が降り注いでいる。

けど、ドラマなんかでは、ここで散歩連れのエリカにあったりすんだよな。

なんてことを考えていると、後ろから

「きれいなサボテンの花ですね。」

驚いて振り向いたそこには、シャワーキャップをしたまま犬の散歩に来ているおばさんが立っていた。笑顔で。

「パジャマで外を歩くなよ……」

心の中でつぶやき、もう一度大きなため息をついた。

そのため息は、サボテンの花が吸い込んだ気がした。

(後書き)

作者が生まれて初めて書いた短編です。

これより、少しずつ他の媒体で書いた小説を載せていきます。

少しずつ、でも着実にうまくなっていきますので、気になったらまたぜひ見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4220o/>

さぼてん

2011年10月8日03時53分発行